徳島新聞　平成29年12月23日(土)

免疫チェックポイント阻害剤

甲状腺異常の副作用も

症状あれば すぐに検査を

吉田 守美子
徳島大学病院
内分泌・代謝内科
副診療科長

がん何でもQ&A

質問　71歳の女性です。肺がんと診断され、免疫チェックポイント阻害剤の投与を受けることになりました。治療の説明で、自己免疫疾患の有無を聞かれました。私には橋本病（慢性甲状腺炎）があります。治療の副作用で橋本病が悪化することがあると説明を受けました。どんなことに気を付ければいいですか。

回答　体内の免疫細胞はがん細胞を攻撃します。一方、がん細胞には免疫細胞の攻撃から逃れる仕組みが備わっています。

免疫チェックポイント阻害剤は、免疫細胞がん細胞を攻撃できる状態に保つ薬剤です。がん治療に有効な半面、過度な免疫反応でさまざまな副作用を起こすことがあります。例えば▽間質性肺炎▽大腸炎▽重度の下痢▽甲状腺機能障害▽肝障害▽腎障害▽皮膚障害▽神経障害▽重症筋無力症▽下垂体機能障害▽1型糖尿病―です。

自己免疫疾患を合併している場合は、自己免疫疾患が悪化する恐れがあります。そこで事前に問診と検査をします。

甲状腺の自己免疫疾患には橋本病やバセドー病があります。免疫チェックポイント阻害剤による甲状腺機能障害は比較的多く、もともと自己免疫性甲状腺疾患があれば、特に起こりやすくなります。

甲状腺機能障害には機能低下症（ホルモン不足）と中毒症（ホルモン過剰）があります。免疫チェックポイント阻害剤による甲状腺機能障害は、一時的に甲状腺ホルモン値が上昇した後に低下症に至る場合と、徐々に機能低下症が進行する場合があります。

甲状腺機能障害が起きると、軽度では症状はありませんが、重度になれば、いろいろな自覚症状が出ます。甲状腺ホルモン過剰の症状は動悸や発汗、手指の震え、体重減少など。甲状腺ホルモン不足の症状は倦怠感やむくみ、便秘、皮膚の乾燥など。ただし、これらの症状はがんによる全身症状と似ています。自身では判断が難しいかもしれません。

甲状腺機能障害は、血液で甲状腺ホルモンなどを調べて診断できます。甲状腺機能の異常を疑う症状があれば、すぐに検査しましょう。症状がなくても早期発見のためには定期的な検査を勧めます。

甲状腺中毒症は一時的なことが多く、まずは対症療法（頻脈を抑える薬など）で経過を見ます。甲状腺機能低下症は、不足した甲状腺ホルモンを補充（内服治療）します。

甲状腺機能異常の副作用が出ると、いったんがん治療を休止することがあります。症状がよくなれば治療を再開するのがほとんどです。

甲状腺異常だけでなく、副作用を早期に発見するため、可能性のある副作用についてよく知っておきましょう。治療のパンフレットに気を付ける症状があります。大切に保管して当てはまる症状があれば、すぐに主治医や内分泌専門医に相談してください。

（第4土曜掲載）

甲状腺機能障害の主な症状

ホルモン過剰
- 動悸
- 発汗
- 手指の震え
- 体重減少

ホルモン不足
- 倦怠感
- むくみ
- 便秘
- 皮膚の乾燥

がんに関する質問は
徳島がん対策センター
〈電088（634）6442〉
（平日午前8時半から午後5時まで）へ。